

HANDS あかり 通信・12

HANDSとは、Hanshin-Awaji Network for Disaster Survivorsの頭文字をとり震災とそこから生まれた支え合う「こころ」を伝えひろげるため設立されました。

いま想うこと

20年ぶりの寒波に見舞われた昨年12月17日、神戸市役所南隣りにある東遊園地の一面に建立されている『慰霊と復興のモニュメント』の地下瞑想空間に、震災死とは認められなかった遠因死の方々と神戸市外でいのちを落とされた方々49名の銘板の掲示をおこないました。銘板の掲示は今回で6回目になりました。

震災後に移り住んだ横浜で「神戸に帰りたい・・・」と言い残して亡くなられたおばあちゃん、アメリカから「自分のルーツであるアジアを知りたい」と日本を訪れ、亡くなられた中国系アメリカ人のおじょうさん・・・今回掲示された49枚の銘板の一枚一枚に、それぞれの想いが込められていました。

愛する家族の死を公の死としては認めてもらえず、「・・・震災がなければこんなことにならなかったのに・・・」という想いで、その死をなかなか受け入れることが出来ないご遺族が、たった一枚の、亡くなられた方のお名前を刻んだ銘板を『慰霊と復興のモニュメント』に貼ることで、こころの癒しになるのなら掲示しよう」との想いから始まった銘板の掲示は、今回で275名になりました。

銘板をご自分の手で貼り付けられたご遺族の顔に安堵の表情を見た時、「この活動をはじめてよかった」と思うとともに、この10年間悲しみや苦しみを抱えていらしたご遺族のご苦労を改めて嘯み締めました。



阪神淡路大震災「1.17希望の灯り」代表 *堀江正幸*



「1.17希望の灯り」を清掃するHANDSメンバー

今回の『灯り通信』は、僕が震災後にお付き合いを始めた方々(ご本人たちはお付き合いしている)と自覚してい



写真提供:新たに銘板の掲示をされた宮本さん

るかどうか!?)に、『いま想うこと』を書いていたいただきました。ご出筆に感謝!感謝!

11年目を目前にして、あらためて『継続することの必要性と困難』を思い悩みながら、俳優業をする今日この頃です。

これからも『本気のお付き合い』よろしく!!

1995年1月17日阪神淡路大震災、あの日から10年

いま想うこと

多くの方から「この10年のおもい」をお寄せいただきました。

鎮魂のエネルギー

陳 舜臣氏 (作家)

五ヶ月にわたる入院生活を終え、退院四日目に私は震災に遭った。我が家のあたりは地盤がしっかりしていたので、倒壊は免れたが、かんじんの自分のからだは、まだ自由にうごかない。からだを使っての復興作業のお手伝いは、残念ながらできなかった。

私にできることといえば、ペンをとってこの惨事を、ひろく、そしてながく伝えることしかなかった。震災の数日後、私は脳内出血の後遺症で、ただどしい文字で神戸新聞に「神戸よ」というタイトルで神戸市民に呼びかけた。

神戸市民の皆様、神戸は亡びない。

新しい神戸は、

一部の人が夢見た神戸ではないかもしれない。しかし、もっとかがやかしいまちであるはずだ。

.....

その年の歳末、好例の「万人の第九」に、「劫火を越えて」と題する私の作った地震犠牲者への鎮魂詩を朗読してくれた。

とつぜん 天地が揺らぎ

縦にそして横に 円をえがくように

地鳴りは おそろしげにひびき

.....

大阪城ホールの広い会場に、セレモニーと鎮魂詩朗読がおごそかに進められた。そのあいだ私は最前列に立ったままだった。後列にいた私の妻は、気が気でなかったらしい。右半身が麻痺のため、からだのバランスが保つのに、かなりの無理をしている。いつ倒れるかわからない。だが、私は心のなかで歯をくいしばって辛抱した。震災で犠牲になった人たちのことを思った。とつぜん、理不尽にも未来の時間を奪われた人たちである。いま、私はその人たちのために、生き残った者たちを代表するように、鎮魂の詩をささげているのだ。それを、その朗読の途中で倒れたりしてなるものか。ずっと立っていることが生きているものの礼儀である。

このときだけではない。折にふれて、私は鎮魂の心の姿勢になる。そのたびにふしぎなエネルギーが、からだからわきあがるのをかんじる。



HANDSのあゆみ

2002年3月の設立から2005年末までの活動の一部を写真でご紹介します

さまざまな出会いから始まりました



2002年11月16日



設立総会



初代理事長 白木利周氏

10年たっても今日のこと

下河辺 淳氏 (元阪神・淡路復興委員会委員長)

阪神・淡路大震災の復興事業は、私の生涯の中で忘れることのできない大事業でした。HANDSの活動が絶えることなく続けられていることで救われる思いで感動しています。大震災で亡くなられた方々に心から哀悼の意を表し、心身に痛みを持って生活を送られている方々には、どうぞ生涯を大切に生き抜いていただきたいと念じております。

当時、高知の四万十川で水系の流域問題を語り合っていましたら、突然村山総理からすぐに会いたいとの電話が入り、早速総理とお会いしました。総理からは阪神・淡路大震災復興委員会を開催することにしたので、私に代表を務めてくれとのお話があり、私は引き受けざるをえませんでした。

委員会には兵庫県知事、神戸市長も参加され、委員の皆さんと話し合いを始めました。委員会

の仕事は緊急を要するものでしたから、開催のたびごとに政府がなすべきことを提案し、総理が提案を実施するということになりました。

委員は誰一人、欠席、遅刻、早退することなく、全員の合意を求めて熱心に討議が続きました。そして一年間で予定どおり会議を終了し、全ての提案をまとめあげることができました。

私は委員会の提案が少しでもお役に立てばという思いでいっぱいでした。一年経って全ての提案を終わり、委員会が終了した後も、世間からはもっと続けるべきであるというご批判も受けました。

当時から私たちは日本列島の全ての震災政策を制度化すべきであると考えていました。阪神・淡路大震災だけの問題ではないのです。政府は国土交通省で真剣に政策立案すべきです。

最後に第一セクター政府、第二セクター民間企業、第三セクターNPOそれぞれの役割を思い、第三セクターHANDSの役割の大きいことを再確認したいと思います。



<p>2002年11月16日</p> <p>いのち まひつが</p> <p>事件事故のご遺族と語り合う</p>	<p>2002年11月17日</p> <p>震災コミュオ交流ウォーク&交流会</p>	<p>2003年1月8日~17日</p> <p>「1.17希望の灯り」分灯 シアトルへ</p>
<p>2003年1月17日</p> <p>「阪神淡路大震災1.17のつどい」</p>	<p>2003年4月11日</p> <p>震災コミュオ交流ウォーク (東灘区)</p>	<p>2003年5月1日~</p> <p>灯り通信の発行</p>



1月17日は忘れない ～安全・安心な兵庫づくりに向けて～

井戸 敏三氏 (兵庫県知事)

鴨長明の「方丈記」に、「人みなあぢきなき事を述べて、いささか心の濁りも薄らぐと見えしかど、月日重なり、歳経にし後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし」という一節があります。元暦2年(1185年)7月の京阪大震災の模様を記したものとされています。



歲月とともに、さまざまな出来事が忘れ去られていく。そうした世の無常を述べたのですが、私は、その裏に、「だからこそ、大切なことは伝えていかなければならない」という、時代の転換期を生きた長明の願いが込められているように思えてなりません。

6400名を超える尊い生命とかけがえのない多くのものを奪い去った阪神・淡路大震災から11年。この間、「阪神・淡路大震災1.17希望の灯り」に集う皆さんは、自らの体験を語り伝えることで、人々に勇気や希望を与えてくれました。皆様の真摯な取り組みに、心からの感謝と敬意を表します。

思い返したくない、忘れてしまいたいあの惨状。

しかしその気持ちを乗り越え、内外からの温かい支援の輪のなかで、深い悲しみや痛みを胸におさめ、幾多の困難に立ち向かってきたことを決して忘れず、後世に語り継いでいくこと。あの震災を経験した兵庫だからこそ、この強い思いを胸に、安全・安心な社会づくりを内外に訴え続けていかなければなりません。

これまでの復旧・復興の歩みのなかで、人と人との助け合いや支え合いを基調とした成熟社会の先導的な仕組み、そして日頃から減災に取り組む「災害文化」など、被災地からはいくつもの新しい芽が育ってきました。この芽を大きく育て確かなものにしていくことが何よりも大切です。



「1月17日は忘れない」。大震災の経験と教訓や創造的復興の成果を礎に、21世紀の兵庫の大きな飛躍をめざし、元氣な兵庫づくり、安全・安心な兵庫づくりに、ともに手を携え取り組んでいこうではありませんか。



2003年5月17日



「1.17希望の灯り」修復

2003年7月5日



震災コミュニティ交流フェア(西宮市)

2003年7月19日



クエーサーチャリティライブ

2003年7月26日



ひまわりウォーク

2003年8月7日



神港学園高校甲子園出場で応援

2003年8月24日



震災コミュニティ交流フェア(長田・兵庫区)

1. 17を忘れない

矢田 立郎氏 (神戸市長)

私はこの10年はひとつの節目であると思っています。10年が過ぎると、あの震災のことすら記憶の中から少し薄れるのではないかとと言われる方がいます。私は決してそうであってはならないと思います。私たちはこの「1. 17を忘れない」というひとつの大きな思いを持ち続けなければいけないと思います。

この10年間、全世界の人々の励ましに支えられ、くじけそうになる気持ちを奮い立たせ、どんなに辛くても前を向いて一步一步、復興の道を歩んできました。その過程で、人と人との絆の大切さや感謝の気持ちを忘れないこと、そしてかけがえない命をまもるために、減災という視点でまちを創っていく重要性を学びました。このような貴重な教訓を全世界に発信し、将来へと語り継いでいくことは、被災地としての我々の責務であり、また、率先して神戸が取り組まなくてはなりません。

震災から10年の時を経て、神戸のまちは新たなスタートラインに立っています。神戸空港～マリンエアの開港は、今まさに神戸が飛躍するのにふさわしい瞬間です。陸、海、そして空から新たな人・物・情報の交流が本格化し、震災を乗り越えた神戸は、未来への飛躍に向け大きく変貌するものと確信しております。

この大切な時期にあたり、あらためて「1. 17を忘れない」という思いを胸に、皆様方とともに、市民一人ひとりがくらしに豊かさを実感できる神戸の実現をめざし、新しい一步を踏み出しましょう。



2003年10月18日



震災メモット交流ワーク (芦屋市・東灘区)

2003年10月23日



「慰霊と復興のメモット」運営委員会設立

2003年10月26日



フォーラム「遺族たちがメディアに望むこと」

2003年12月17日



「ハコベの会」誕生

2003年12月17日



第1回 新たな銘板の掲示

2005年1月10日～17日



「1.17希望の灯り」分灯

いのちの虹

門前 善康氏 (サンテレビジョン報道部長)

あの揺れから十一年が過ぎようとしている。生き延びた私たちは、あの日から様々な形で「人生」が変わった。

あの日まで「生きていくこと」が当たり前であった私であるが、あの日以来「生きていくこと」の儚さと不思議を思うようになった。

その事を証明するかのように、私の身の回りでは、弟が死に父が死んだ。震災後、共にいのちの大切さを語り合いボランティアに走り回っていた弟であったが、震災から5年後、急逝した。最愛の息子を亡くした父のいのちは、その一年三ヶ月後に燃え尽きた。

また私は、「生き延びた」のだ。生き延びた人間が何を成すべきであるか。それは、「大切ないのち。そのいのちをどう大切にするのか」を想い、行動することであると私は思う。

私は震災当時、現場の記者として「震災」を取材した。その後私は、取材現場は離れることになったが、この思いはより強くなっている。

2005年の一月十七日朝、被災地に綺麗な虹が掛かった。あれは震災犠牲者と私たちを繋ぐ、「いのちの虹」だったのだと私は思う。

あの揺れといのちの虹が結びおり 善康



2004年1月17日



「阪神淡路大震災1.17のつどい」 (コンサート、フォーラム)

2004年1月17日



第2回 新たな銘板の掲示

2004年2月21日



「オヤジの会」誕生

2004年3月21日



震災メモット交流ウォーク (明石市)

2004年5月16日



2004年度総会



2代目理事長 松浦潔氏

2004年6月26日



震災メモット交流ウォーク (中央区)

2004年7月18日



ひまわり写生会

2004年8月4日



「慰霊と復興のメモット」運営委員会

人々の手のぬくもり

田原 護立氏 (関西プレスクラブ事務局長・元毎日新聞編集委員)

あの日、神戸が炎上しているテレビ画面をニューヨークで固唾を呑んで見つめるしかなかった。そして4日後に帰ってきた神戸で、憤りに近い悲しみを感じながらも、人々の「動いている姿」に胸が詰まった。

ひびが入った自宅や全壊した妻の店舗のことはさほどの問題ではないと思った。壊れたモノは再建できる。だが、この日本で、今、目の前で、人々が、水に困り、ミルクに困り、火や灯りに困り、生きのびるためにうごめいている。ネオンが煌煌と輝く街からわずか十数キロの地で、何かがおかしいと思った。

やがて、誰もが、それなりに落ち着きを取り戻しながら日常への回帰が始まった。それ以前と同じ日常を取り戻した人は少ないだろう。そ



れでも、途方もない悲嘆の中に見つけた、新たな、ささやかな、やさしさときずなを糧に、多くの人々が今も歩み続けている。

自然現象は防ぎようがない。だが、

自然現象を「災害」にするのは社会システムの歪みではないか。私たちの無関心や驕りではないか。そう自問しながら、報道する側の一員として、また被災地域の一員として、この地で10年余の大半を過ごしてきた。でも、やはり何かがおかしいと、今も思う。



「HANDS」という英字の略称は、実は、1・17直後の混乱の中にあった避難所での取材体験が原点になっている。「国も県も市も今は何もできやらん。猫の手の方がましや」と嘆いたお年より。あの当時、それぞれに動き回っていた人々は、見ず知らずの人でも、それが取材記者でも、誰もが互いの手を取り合って、励まし合い、慰労し合った。

人々の手のぬくもりには、途方もない力があると私は思う。だから、HANDSという略称を作り上げた時は「できた!」と、思わず叫んでしまった。そして、あの時も今も、何かがおかしいと思うのは、その手のつながりというか、ぬくもりというか、その広がりがまだまだ希薄だと感じるからなのだ。

2004年9月17日



「1.17希望の灯り」修復

2004年9月18日



第3回 新たな銘板の掲示

2004年9月19日



震災メモット交流ウォーク (灘区)

2004年11月13日



震災メモット交流ウォーク (伊丹市)

2004年12月4日



「1.17希望の灯り」分灯 (元町商店街)

2004年12月4日



被災地支援カンパ&メッセージ集め



文字にならなかつた物語

佐藤 謙治氏 (読売新聞社記者)

忘れられない出来事があります。

阪神大震災が起きた直後のこと。神戸市長田区のある酒屋が全壊し、営業を続けようと建てた仮設店舗に小包が届きました。野菜や衣料品、カイロなどがぎっしり。差出人は東海地方の女性でしたが、酒屋の夫婦は知らない名前でした。同梱された手紙には、テレビに崩れた酒屋の看板が偶然映ったのを見て、いてもたってもいられず住所を調べて送った経緯と、励ましの言葉がつづられていました。



夫婦は中身を近所で分け、お礼の手紙を書きました。すると、それから毎月、小包が届くように。夫婦も必ず手紙を送り、電話で話をしました。被災生活や長田の様子、うれしかったこと、時にくじけそうなこと……。女性は高齢で何もできないことをわびながら、心に寄り添ってくれたそうです。夫婦は顔も知らない恩人を家族同然に感じましたが、「店を建て直すことが恩返し」と、それまでは会わないと決めていました。小包は震災から5年たち、店を再建するまで一度も途切れることなく、毎月届きました。

私がこれを知ったのは、店が再開した直後のこと。まだ記者1年目で、たまたま立ち寄った酒屋で知ったのです。すぐに夫婦を通して女性に取材を頼みましたが、断られました。「ほかに取り上げてあげるべき人がたくさんいるはず」というのが理由でした。

そして震災10年。酒屋を5年ぶりに訪ねました。3年ほど前、夫婦と女性は念願の対面を果たしていました。会った瞬間、数十年來の付き合いのように打ち解けたそうです。今度は夫婦に頼んで連絡先を聞き、直接取材を頼みましたが、結果は同じでした。「もっと困っている人を取り上げて」。小包を送ることしかできなかったことが恥ずかしい、とでも言いたげな口ぶりでした。



震災にまつわる数々の出来事に巡り逢いました。文字にならなかつた物語の方が多かった気がします。だからこそ、これからも書き続けたいと願うのです。



2004年12月10日



台風23号被災地へ (豊岡市)

2004年12月11日



新潟県中越地震被災地へ (新潟県)

2004年12月18日



第4回 新たな銘板の掲示

2005年1月15日



震災の語り部派遣 (すまいるプラザ大黒)

2005年1月15日



命の大切さを伝えるフォーラム (東京)

2005年1月10日~17日



「1.17希望の灯り」分灯

「生」をみつめる

井上 二郎氏 (NHK神戸ニュースキャスター)

私は、神戸に転勤する前、沖縄で仕事をして
いた。

神戸と沖縄。この二つの土地には共通点がある。
それは、一度に多くのいのちが奪われた土地と
いう点だ。この土地を経験した私に、多くの人が、
「人の死について考えることが多いでしょう」と
投げかける。しかし、私はこう答える。「いえ、
人の『生』について考えることが多いです」と。

沖縄戦では、県民の4人に1人が犠牲となった
といわれている。何を取材するにしてもその源
は戦争で、出会う人の殆どが「遺族」だった。
一族が全滅して遺族すらいなかったり、肉親同
士が殺し合い、遺族が加害者であるという悲劇
もあった。

何故親兄弟は死なねばならなかったのか。半
世紀以上に渡って問い続ける人々の姿を前に、
私は何も出来なかった。

"なぜ私は死にまつわる話を取材するのか。な
ぜ遺族の話を聞くのか"一。



そして次の
赴任先が、震
災で傷ついた
神戸だった。
私は再び、
「遺族」と呼

ばれる人たちと向き合うこ
とになった。

私は、ただ時間をとも
にするしかできなかった。
食事をし、酒を飲み、泣き、
笑う。桜を見あげる。車に
乗る。プレゼントを贈る。
コーヒーを飲む。その一瞬
一瞬に、愛する肉親を奪われてもなお否応無く
生きねばならない残酷さを感じた。そしてそこ
から一歩ずつ生きる姿勢に、大きく心を動かさ
れた。

亡くなった人への素直な愛を語ること。彼ら
の分まで生きようと思うこと。それに対する遺
族の方々の真剣なまなざし。「生きる」ことに
懸命に取り組む人々の姿がそこにあった。「死」
を取材しながら「生」を実感していたのだ。こ
の当たり前のことがはっきりと見えるまで、長
い時間が経っていた。

私事ながら、震災10年の今年、新しい命を授
かった。
必死に泣き、必死に眠り、必死に乳を飲み、そ
の隙間にわずかながら微笑む。
暖かいのちそのものを抱く。
学んだことをきちんと伝えねば、と思う。



2005年1月16日



震災の語り部派遣 (森林植物園)

2005年1月17日



「阪神淡路大震災1.17のつどい」

2005年1月17日



ひまわり絵画展

2005年1月17日



第5回 新たな銘板の掲示

2005年4月17日



震災メモリアル交流ワークショップ (長田区)

2005年5月18日



ひまわりの種まき



分けてもらった想い

岩崎 昂志氏 (神戸新聞記者)

私は阪神・淡路大震災がこの街を襲ったことを、今も実感できないでいる。当時は小学6年生。兵庫県三木市の実家は、目立った被害がなかった。テレビで流れた衝撃的な映像は覚えている。避難してきた神戸の親戚と、1か月一緒に暮らした。

それでも、「震災」が自分の生活に関わるものだという気持ちはなかった。

神戸で大学生になり、報道サークルに入った。そして2002年1月17日、震災で大学生の子を亡くしたご遺族の方々取材した。故人が幼かったころの話、離れた故郷から大学生活を見守っていた気持ち、地震直後に訪れた神戸の街や下宿の変わり果てた姿、周囲に支えられたその後の生活…。きっともう何度も話してきたはずのことを、語ってもらった。それから、「(亡くなったのは)ちょうど君ぐらいの年齢だったね」と。



その時、震災があった事実を、あらためて知ったように思う。街には新しい建物が立ち並ぶ。しかし生きている人たちは、さまざまな思いをずっと胸の奥に秘めている。親しい人の命が突然に消えること、その喪失感、悲しみ、忘れようとしても決して忘れられず、そして、忘れてはならないこと。

新しい街並みしか知らない私は、地震の怖さや被災後の暮らしの辛さを、本当には分からない。しかし、大学を出て地元紙の記者となり、今、ここにいる人たちの体温を感じることはできるし、一緒に

笑いあうこともできる。震災のことを教えてもらうこともできるし、ほんの少しにしても、悲しみを分けていただくこともできる。

震災への私の思いは、出会う人たちからもらったもの。誰かの話を聞くたびに、これからも膨らみ続けるだろう。震災を知らない世代が増える。しかし気持ちは、少しずつ分け合っていけるものだと思っている。



2005年5月29日



2005年度総会

2005年6月7日



神戸新聞平和賞受賞



HANDSの活動を支えて下さったみなさんと

2005年7月16日



ひまわりの写真会

2005年7月17日



震災メモリアル交流ウォーク (東灘区)

2005年7月21日



台風23号被災地へ (豊岡市)

語り継ぐことの大切

笹山 幸俊氏 (財団法人神戸国際協力交流センター理事長・前神戸市長)

あの朝、激しい揺れを感じて家の外へ出ると、南の方角に火の手が上っているのが見え、被害の大きさを直感しました。当時の助役とともに車で市役所へ駆けつけたのですが、途中、あらゆる構造物が倒壊し、前日までと全く姿を変えた神戸のまちを目の当たりにして、私は言葉を失いました。

平成7年1月17日、兵庫県南部地域を襲った激震は、神戸市内だけでも4千名を超える尊い生命を奪い、私たちの先人が営々と築いてきた美しい神戸のまちに未曾有の被害をもたらしました。

一方で、震災を通して、私たちは人のやさしさや思いやりの大切さを身を持って経験しました。被災した市民の皆さんはお互いに助け合い、励まし合いました。また、多くのボランティアの方々から献身的であたたかい支援や励ましをいただきました。



震災から10年が経過し、私は、この震災で得た貴重な経験や教訓を次世代へと語り継いでいくことが何よりも大切だと感じています。

私は、防災に取り組んできた技術者の方々とともにNPO法人を立ち上げ、近畿一円の地方公共団体等と連携して、防災・減災のネットワークづくりに取り組んでいます。神戸市ではOBと現役の技術職員がともに参加した組織を作り、研修会の開催等の活動を行っています。人が替わっても経験や教訓が途絶えることがないように、このようなネットワークづくりが重要だと考えています。

時間の経過とともに、神戸にも震災を経験していない人々が増えていきます。「希望の灯り」が東遊園地でいつまでも灯り続けるように、私たちは、震災の経験や教訓を絶やすことなく次世代に語り継ぎ、伝えていきたいと思います。



2005年8月19日



「1.17希望の灯り」分灯「こうべうみの盆」(中央区)へ



2005年8月19日



「1.17希望の灯り」分灯「KOBEN'-Lキャンドル」(垂水区)へ



2005年10月2日



震災コミュニティ交流ワークショップ(中央区)「鎮魂のうた・海岸通り」前



2005年12月17日



第6回 新たな銘板の掲示

HANDSご入会について

私たちの活動は、みなさまからの会費とご寄付で運営されております。HANDSの活動にご賛同していただける方は、是非ご参加下さい。

ご入会方法

下記の郵便振替口座に、正会員又は賛助会員、おなまえ・ご住所・電話番号をお記入の上、年会費をそえてお申度ください。会報、活動・イベントのお知らせを送らせていただきます。年会費は、ご入会から1年間有効です。

年会費

正 会 員	個人	1口		企業 団体	***
		賛 助 会 員	1口		

郵便振替口座名 「希望の灯り」 口座番号 01120-7-70117

正会員137名 賛助会員1,284名 (平成17年12月15日現在)

★ご入会・更新又はご寄付いただいた会員の方々

平成17年8月1日～12月15日まで

正会員	賛助会員	個人	企業 団体				
<p>■8月</p> <p>大石 栄</p> <p>■10月</p> <p>後藤 理能</p> <p>井上 隆文</p> <p>川畑 和久</p> <p>高橋 貞美</p> <p>有光 るみ</p> <p>西角 良一</p> <p>松本 敏之</p> <p>大下 久子</p> <p>大下 幸夫</p> <p>越川 元寛</p> <p>■9月</p> <p>天羽 公子</p> <p>岸 桂子</p> <p>永井 祥子</p> <p>柳生 芳枝</p>	<p>市原 聡美</p> <p>柴田 康彦</p> <p>多賀谷 誠</p> <p>辻 美佐緒</p> <p>■12月</p> <p>宮島 弘明</p> <p>後藤 理能</p> <p>■8月</p> <p>井手 保子</p> <p>大瀬 豊子</p> <p>岡田 セツ</p> <p>奥村 カオル</p> <p>奥村 弘</p> <p>富山 佐智恵</p> <p>堀内 朝子</p>	<p>宮元 道枝</p> <p>山本 京子</p> <p>河本 雨一</p> <p>正面 きよみ</p> <p>正面 昇</p> <p>須田 美子</p> <p>田栗 照子</p> <p>西角 ひで</p> <p>春名 宏子</p> <p>福原 道茂</p> <p>森 隆子</p> <p>山田 裕子</p> <p>由利 旭</p> <p>大下 貴久</p> <p>大下 智久</p> <p>大下 直秀</p>	<p>福田 壽</p> <p>三浦 和子</p> <p>光岡 理恵</p> <p>向井 洋子</p> <p>柳 みさを</p> <p>山下 須恵子</p> <p>熊野 和子</p> <p>熊野 東経</p> <p>田中 文子</p> <p>田中 和弘</p> <p>田中 廣子</p> <p>津田 弘臣</p> <p>今井 愛子</p> <p>今井 愛子</p> <p>花村 紀子</p> <p>藤 川 尚子</p> <p>池田 尚三</p> <p>阪口 加都</p> <p>西田 幸代</p>	<p>水川 由喜</p> <p>宮首 好雄</p> <p>山本 純子</p> <p>横田 たつ子</p> <p>池村 博隆</p> <p>近藤 孝子</p> <p>阪口 尚子</p> <p>一 条 勲</p> <p>乙山 伴忠</p> <p>齋藤 敏彦</p> <p>指田 和子</p> <p>佐藤 正六郎</p> <p>田中 文子</p> <p>田中 和弘</p> <p>田中 廣子</p> <p>西田 幸代</p>	<p>高 さだ代</p> <p>常深 充良</p> <p>中島 勉</p> <p>原口 昭代</p> <p>■11月</p> <p>岡本 妙子</p> <p>辻 昭平</p> <p>辻 由隆</p> <p>永野 実歩</p> <p>山田 瑞子</p> <p>近藤 啓子</p> <p>長谷川 すみ子</p> <p>藤川 正子</p> <p>古川 みち代</p> <p>法西 浩</p> <p>立井 隆宏</p>	<p>山下 京子</p> <p>■12月</p> <p>浅井 メイ</p> <p>李 静子</p> <p>大塚 昌子</p> <p>小笠原 美智代</p> <p>佐藤 幸子</p> <p>田栗 照子</p> <p>西川 恵子</p>	<p>団体・企業賛助会員</p> <p>■8月</p> <p>神戸市保育連盟</p> <p>金光教 (大手教会・駒ヶ林教会・桜口教会・大開教会・長田教会・西近畿教務センター・布引教会・兵庫教会・真合教会・福原教会・山手教会・神戸市教会連合会収集活動グループ)</p> <p>■10月</p> <p>元町1丁目商店街振興組合</p> <p>元町3丁目商店街振興組合</p> <p>元町4丁目商店街振興組合</p> <p>元町6丁目商店街振興組合</p> <p>■11月</p> <p>三宮センター街1丁目商店街振興組合</p> <p>■12月</p> <p>六甲山水の祭典実行委員会</p>

★ご寄付をいただいた方々および団体 ※(銘)「慰霊と復興モニュメント」の新たな銘板掲示、(バ)「パキスタン被災地支援」へのご寄付です。

<p>■9月</p> <p>市田 正子</p> <p>宮本 彌栄子 (銘)</p> <p>■10月</p> <p>白木 利周 (バ)</p> <p>中島 喜一 (バ)</p> <p>宮原 壽夫 (銘)</p> <p>山谷 つや子 (バ)</p> <p>竹下 弘二 (バ)</p> <p>平岡 秀元 (バ)</p>	<p>藤本 東美子 (バ)</p> <p>神沢 美行</p> <p>三浦 薫</p> <p>路 冬美 (バ)</p> <p>越川 洋三 (バ)</p> <p>奥西 弘二 (バ)</p> <p>納谷 幸雄 (バ)</p> <p>池田 有季子 (バ)</p> <p>常深 充良 (バ)</p> <p>中島 勉 (バ)</p> <p>小笠原 利一</p>	<p>平野 美智子 (バ)</p> <p>村上 光子 (バ)</p> <p>浅田 恵子 (バ)</p> <p>上村 めぐみ (バ)</p> <p>大西 恵子 (バ)</p> <p>小川 富士子 (バ)</p> <p>小野 照子 (バ)</p> <p>小野 容子 (バ)</p> <p>澤井 圭子 (バ)</p> <p>柴田 康彦 (バ)</p>	<p>中植 迪夫 (バ)</p> <p>濱田 幸弘 (バ)</p> <p>藤野 佳秀 (バ)</p> <p>森田 栄子 (バ)</p> <p>山本 純 (バ)</p> <p>岡崎 ヒロ子 (バ)</p> <p>久保 健一 (バ)</p> <p>久保 信代 (バ)</p> <p>窪田 美美 (バ)</p> <p>小山 保彦 (バ)</p>	<p>常深 雄二 (バ)</p> <p>中島 千加子 (バ)</p> <p>浜名 周三 (バ)</p> <p>浜名 民子 (バ)</p> <p>浜野 好子 (バ)</p> <p>藤崎 宗敏 (バ)</p> <p>古澤 美絵 (バ)</p> <p>村田 美紀子 (バ)</p> <p>元橋 照子 (バ)</p> <p>安田 貴三 (バ)</p>	<p>山内 仁 (バ)</p> <p>吉山 直樹 (バ)</p> <p>尼崎市西灘波訪問看護ステーション (バ)</p> <p>■11月</p> <p>足立 朝子 (バ)</p> <p>柴田 康彦 (バ)</p> <p>長谷川 すみ子 (銘)</p> <p>平石 美晴</p> <p>船越 亮一 (バ)</p>	<p>増田 登世子</p> <p>飯田 洋</p> <p>大野 俊之</p> <p>■12月</p> <p>田栗 照子 (バ)</p> <p>側 明美</p> <p>小谷 英子 (バ)</p> <p>三宅 弥生 (銘)</p> <p>山城 敏子</p> <p>山田 香織</p>	<p>若山 晶子 (バ)</p> <p>神戸風月堂</p> <p>西宮工場OB会</p>
--	--	--	---	---	---	---	--

*敬称は略させていただきます。ご不審な点がございましたらいつでもお問い合わせください。

応援ありがとう!!

<p>石光商事棟</p> <p>エスケー食品棟</p> <p>(株)エフエルエス</p> <p>(有)エムエフケイ</p> <p>神岡田金属工業所</p> <p>川西銭太鼓幸の会</p> <p>神戸Town Wedding</p> <p>韓どりむ社</p> <p>DBサービス</p> <p>韓日興商会</p> <p>(財)兵庫県薬剤師会</p> <p>韓プロファクトリー</p> <p>韓ベイエリア</p> <p>吉野建設棟</p> <p>韓アート・ファーマー</p> <p>(NPO法人)風のたき</p> <p>モリモトマサ硝子</p>	<p>(有)高嶋機工</p> <p>ダイハツ40会</p> <p>神戸武夷登山会</p> <p>門口自治会</p> <p>ひまわりウェブ事務局</p> <p>フェニックス・ひのくち</p> <p>カンサイタパコショップ</p> <p>神戸看護福祉研修学院</p> <p>韓神戸ニュータウン開発センター</p> <p>ダイハツサービスOB会</p> <p>こころ鍼灸整骨院</p> <p>兵庫県児童養護連絡協議会</p> <p>(社)大阪ボランティア協会</p> <p>横浜雙葉学園アンナ会</p> <p>韓PHP研究所</p> <p>大慈保育園</p> <p>つぐみ保育園</p>	<p>社会福祉法人 大慈厚生事業会</p> <p>社会福祉法人 神港園</p> <p>社会福祉法人 絆福祉会</p> <p>社会福祉法人 神佛会</p> <p>社会福祉法人 六甲福祉会</p> <p>金光教 (韓教会・大開教会・長田協会・兵庫教会・真合教会・福原教会・山手教会・駒ヶ林教会・布引教会・桜口教会・西近畿教務センター・金光教神戸市教会連合会収集活動グループ)</p> <p>(財)阪神・淡路大震災記念協会</p> <p>(財)神戸市演奏協会</p> <p>元町1番街商店街振興組合</p> <p>元町3丁目商店街振興組合</p> <p>元町4丁目商店街振興組合</p> <p>元町5丁目商店街振興組合</p> <p>元町6丁目商店街振興組合</p> <p>がんばろう世田谷</p>	<p>韓アロエベラエンタープライズ</p> <p>21世紀歯科医師ボランティアグループ</p> <p>特別養護老人ホームヘルシーピラ加美</p> <p>韓ビューティ・アソシエイト・ゴースト 時 357177</p> <p>三宮センター街1丁目商店街振興組合</p> <p>三宮センター街2丁目商店街振興組合</p> <p>三宮センター街3丁目商店街振興組合</p> <p>三宮センター街東通商店街共同組合</p> <p>大阪ガス韓「小さな灯」運動事務局</p> <p>のじぎく大会実行委員会事務局</p> <p>のじぎく兵庫国体実行委員会有志</p> <p>(NPO法人)KOBE観光ボランティア</p> <p>(NPO法人)子供地球基金</p> <p>(NPO法人)西すず安心センター</p> <p>UNN関西学生報道連盟</p> <p>元栄海4丁目観和会</p> <p>元栄海4丁目町内会</p> <p>六甲山水の祭典実行委員会</p>	<p>韓マイスター大学堂</p> <p>あかね工房</p> <p>川西倉庫OB会三勤会</p> <p>韓ディ・オー</p> <p>繁栄自治会</p> <p>北斗会</p> <p>カフェ ひげおやじ</p> <p>江戸川ミニポンプ(株)</p> <p>阪本自動車工業(株)</p> <p>関西プレスクラブ事務局</p> <p>神戸市老人クラブ連合会</p> <p>神戸市保育連盟</p> <p>神戸市職員労働組合</p> <p>神戸交通労働組合</p> <p>神戸市道路公社</p> <p>神戸市秘書室</p>
--	--	--	--	--

◆編集後記◆

震災モニュメントマップ作り、希望の灯り点灯、HANDS設立など、現在に至るまでのさまざまな出会いに感謝!!みなさんありがとう。

●●●ご存知ですか?実は堀内さんは俳優さん。

堀内正美さんが1月13日(金)から始まるNHK金曜時代劇「出雲の阿国」に出演します。いつもと違う(?)俳優の顔がテレビで見れますよ～。お楽しみに!! (編)

特定非営利活動法人

阪神淡路大震災「1.17希望の灯り」

〒651-1131神戸市北区北五葉1-13-1 レ・アールビル3F

TEL: 078-595-2800 FAX: 078-595-2801

E-mail: kibou@family.plala.or.jp

URLhttp://www1.plala.or.jp/monument/